二面の箏

鈴木鼓村

青空文庫

自分の京都時代にあった咄をしよう。

元来箏という楽器は日本の楽器中でも一番凄みのあるものだ、私がまだ幼い時に見た草艸紙の中に豊國だか誰だったか一寸忘れたが、何でも美しいお姫様を一人の悪徒が白刃で真向から切付ける。姫は仆れながらに、ひらりと箏を持ってそれをうけている、箏は斜めに切れて、箏柱が散々にはずれてそこらに飛び乱れ、不思議にもそのきられた十三本の絃の先が皆小蛇になって、各真紅の毒舌を出しながら、悪徒の手といい足といい首胴の差別なく巻き付いている、髪面の悪徒は苦しそうな顔をして悶き苦しんでいるというような絵を見た事があるが、自分は幼な心にも物凄く覚えて、箏というものに対して何だか一種凄い印象が今日まで深く頭に刻み付けられているのだ、論より証拠、寺の座敷か、御殿の様な奥まった広い座敷の床の間へでもこれを立て懸けておいて御覧なさい、随分いやな感のするものだ。殊にこれは横にしたよりも縦にすると一層凄く見える。それかあらぬかロセッチの画いた絵に地中海で漁夫を迷わす サエレンという海魔に持たしてあるのは日本の箏だ、しかもそれが縦にしてある、ロセッチは或はこれを縦に弾くものと誤解したのかもしれぬが、この物凄い魔の女に取合わした対照は実に佳いと思った。

前置づきだが、要するに箏というものは何だか一種凄みのあるものだということに過ぬ、これから談すことも矢張箏に関係したことなので、その後益々自分は箏を見ると凄い感が起るの

である。

私が京都に居った時分私の女門弟に某という娘があった。年齢はその頃十九だったが、容貌もよし性質も至って温雅な娘でまた箏の方にかけては頗る天稟的なので、師匠の自分にも往々感心する様なことがあったくらいだ。その時分両親はまだ健全で、親子三人暮し、家も貧しい方でもなく先ず普通の生活をしていた、元来がこういう温和な娘だったから、親達の命令には少しぐらい無理なことがあっても自分の意を屈げても従うと言う風であった。容貌は佳し性質もこんな温厚な娘だったが、玉にも瑕の例でこの娘に一つの難というのは、肺病の血統である事だ。娘自身も既にそれと心付き、それに前にいった様に温雅な――寧ろ陰気と言う方の質だったから、敢て立派な処へ嫁に行きたいと云う様な望もない、幸い箏は何よりも好きの道だから、自分はこの道を覚込んで女師匠に一生一人生活をして行く方が、結句気安いだろうと思ったので、遂に自分の門弟となったが、技術の上には前いう如く天稟的だし当人も非常に好きなものだから技術は日に増し上達する。自分も特別心懸けて教えていたが、その時分は最早自分で大分門弟をとって立派にかんばんをかける様になった。ところが娘はそうは云うものの両親も一度はそれを許してもみましたが、最早年頃でもあるし同じ朋輩が皆丸髷姿に変るのを見ると親心にもあまり良い心持もしない、実は密かに心配をしていたのだ。すると突然縁談が起ったというのは、何でも、その娘を或男が外で見染めたとかで、是非というつまり容貌望みで直接に先方から懇望して来たのである。両親も大変喜んで種々先方の男の様子も探ってみたが

大した難もないし、殊に先方からの強っての懇望でもあるから、至極良縁と思ってそれを娘に談すと、一度は断ってはみたが、もとより両親の言ではあるし、自分でも強いて淋しい生活に入るのを望むわけでもないから、一切両親にまかすことにしたのがそもそも娘の不運の基であった。

両親は頗る喜んで早速この由を先方へ通ずる、そこで、かたの如く月下氷人を入れて、芽出度く三々九度も終ったというわけだ。

男というのは当時某会社に出勤していたが、何しろこんなにまで望んで嫁った妻のことでもあるから、若夫婦の一家は近所の者も羨やむほど睦じかった。しかしこれもほんの束の間、後でだんだん知れてみると、この男というのは性質の頗るよくない奴で、女房を変えること畳を変えるが如きほどにも思っていない、この娘が丁度三人目だとの事、それもこれも最早後の祭りで既に遅い、男はそろそろ妻に秋風が吹いて来た、さあ、こうなると、こんなつまらない女房は無い家へ帰ってもつまらないと、会社からすぐ茶屋へ廻るという有様で、始終家を外の放蕩三昧、あわれな妻を一人残して家事の事などは更に頓着しない、偶に帰宅すれば、言語のいい様箸の上げ下ろしさては酌の仕方が悪るいとか、琴を弾くのが気にくわぬとか、打ち打擲はまだしもの事、或時などは、白魚の様な細指を引きさいて、赤い血が流れて痛いので妻が泣くのを見て、カラカラと笑っていると云った様な実に狂気じみた冷酷の処置であった。あまりといえばあまりの事、さりとて実家に帰ってこの苦痛を訴えて両親に心配させるのもこの

女の出来ぬ事だし、兼て自分とは普通一片の師匠以上に親しんでおったので、或時などは私の許へ逃げてきて相談をした事もあった、私も頗る同情に堪えなかったが、別にこの縁談については中に立ったというわけでもなし、旁々下手に間に入って口をきくと、反て先方から怨まれなどした事もあったので、恰も向岸の火事を見る様に傍で見ていて如何する事も出来ず、唯はらはらと気を揉んでいたばかりであった。

　そうこうする内に、これらの苦痛や煩悶がもとで前よりあった肺病が一層悪くなって終に娘はどっと床についた、妻がこんな病気になったからとて、夫は別に医師にかけるではなし、結局それを楯に出て行けがしのしうちをして、相変らず外遊びはやまなかった、娘の実家でも病気という事の趣を聞いて早速実母が看病にと泊りに来た、するとあろう事かあるまい事か、夫も夫なら母も母だ［以下、二十二字分の伏字あり］人面獣心のこの二人は、今かかる病床に苦しんでいる娘の枕許で、［以下、十字分の伏字あり］け散らしていた。嫁入の時に持って来た衣服道具などはいつしかもうこの無情な夫の遊蕩の費となって失われておった。私も兼て病気と聞き見舞に行きたいと思ったが、何をいうにも前述の如き仕儀なので、反て娘の為めに見舞にも行けず蔭ながら心案じていたのである、幸に心やさしい婢女の看護に、いくらか心をなぐさめられて、おしからざる命を生きながらえていました。左様、床には四ヶ月も居たろうか、すると驚いたのは母が現在自分の夫［以下、四字分の伏字あり］した事である。床中に呻吟してこの事を知った娘の心は如何であったろう、彼女はこれを聞てから病も一きわ重って、

忘れもしない明治三十八年八月二十一日の夜というに、終にこの薄命な女は、呪うべき浮世を去ったのである、さすがの夫もまさかこの夜は傍に居たかと思いの外、この夕方女は喀血をして、非常に衰えていたのを見知っていながら、夫は母と共に外出して夜更けても帰って来ない、もう病人は昏睡状態に陥って婢中の腕に抱れていたが、しきりに枕の下を気にして口をきこうとして唇をかすかに動かせども、もう声が出ない、またもやしきりに烈しく血を吐いたが遂にそのまま睡るが如くに息は絶えた。間もなく二人は帰って吃驚したがそれ程にも悲しい様子でもない、早速実家の父親へ使を走らして、飛んで来た父親だけはさすが親子の情ですくなからず、悲歎の涙にくれていた、前に云うのを忘れたがこの母に比して父という人は評判の好人物であったのだ、婢女の談で兎に角気になるから皆に立合った蒲団の下を見ると、はたせるかな、二通の遺言状が出た、何時書きしものか解らねど、ふるえた手跡に鉛筆での走り書きで一通は、師匠の私へ宛てた今日までの普通の礼を述べた手紙で、尚一通のは即ちこの父親に残したものであった、これは長いものだったが要を摘んで談せばまあこうである。

妾は頼みなき身をこのたより少なき無情の夫の家にながらえいる、最早妾の病も到底治ることもあるまい、親たる父に未だ孝の道も尽さずして先だつ不孝は幾重にも済まぬがわたしは一刻も早くこの苦しい憂世を去りたい、妾の死せる後はあの夫は、あんな人故死後の事など何も一切関わぬ事でしょう、また葬式一切の費用に関しても、最早自分の衣類道具も片なくなっている際でもあるし、如何な事をするかも知れない、が妾は死しての後はあの安らかな世に行く

様せめては一本の香烟を立ててもらいたいが、それも一度実家を出でてこの家の妻となりしものが、死せる後再び父なる人の御世話になるのは、しに行く我心にとって誠に心よくないから、実は妾にとっては何とも心もとないことだが時節なれば致方ないと諦めて過日は日頃愛玩の琴二面を人手に渡して、ここに金が六十円出来た、老いたる親に思いもよらぬ煩をかけて先だつ身さえ不幸なるに、死しての後までかかる御手数をかけるは、何とも心苦しいが、何卒この金を以て、妾の身は貴下の手から葬式をして一本の御回向を御頼み申ます。憶出せばこの琴はまだ妾が先生の塾に居った時分何時ぞや大阪に催された演奏会に、師の君につれられて行く時、父君が妾の初舞台の祝にと買い賜われたものだ、数千人の聴客を以て満たされた、公開堂の壇上、華かなる電燈の下で、満場の聴衆が喝采の内に弾きならしたはこの琴であります、またこの一面は過ぎし日妾が初めて、自宅にて教授をする時に妾の僅かなるたくわえにて購いしもので、二面共に妾にとっては忘る可らざる紀念の品である、のみならず、この苦しく悲しき長の月日のこの中外を慰めたのもこの品、仮令妾には数万金を積むとてかえがたき二品なれど、今の際なれば是非も一なく、惜しけれど、終に人手にわたす妾胸中は如何ばかり淋しき思のするかは推したまわれ、されど、たとえ人手に渡さばとて、やがてこの二面の琴は、師の君が同門の人に由りて購わるることを保証します。自分は今この二品の琴樋の裏に貼紙をなして妾の日頃愛玩せることを記しおきければ、やがて、その人に由りて、これを知らるるでありましょう、これは今より確言をしておきます……

他に未だ何か記してあったが、遺書の大体の意味はこういうのであった。

談変って、私は丁度その八月十九日に出発して、当時は京都から故郷なる備中連島へ帰省をしていた薄田泣菫氏の家を用向あって訪ねたのである、そして、同氏の家に三日ばかり滞在していた、ところが、その廿一日の夜には、氏の親戚を初め近隣の人々を集めて、或る場所で自分の琴を聴かした、十時少し前後演奏が終りて、私は同氏の家へ帰って泣菫氏と共に、枕を並べて寝に就いた、

すると恰も十二時過ぎたかそれとも十二時頃だったか、私の寝ていた傍の床の間に立て懸けておいた、琴が突然音を立てて鳴り出したのである、泣菫氏は最早よく寝ていたので、少しも知らぬ、室内には、薄燈がついていたので、私は驚きながらも枕から頭を擡げて、何れの糸が鳴るのかを、たしかめんとしたが、解らない、その間は僅三分ぐらいであったろう、如何にも物凄い音をしてブーンと、余韻を引いて鳴っていた、勿論夜が更けている故、戸も立ててあるし、風などがそう入るわけがないが、静かな室の内に沈んだ音をしてなったのである。自分は未だ空鳴という事を経験した事がなかったので、これが俗にいう、琴の空鳴というものだろうと思ったが、それなり演奏の疲労れで何事もなく寐てしまった、翌朝に目を覚まして泣菫氏にも、この由をはなしたのである、同氏の家には後二日ばかり厄介になって、私が京都に帰ったのは、即ち廿三日の昼であった、家へ帰って、聞くとその娘は廿一日の夜に死んだ、今日が、恰度葬式だとの事、段々その死んだ刻限をきき合わしてみると、自分が聴いた箏の音の刻

限とぴったり合うので、私は思わず身震をしたのであった、それから早速自分も駈けつけて葬礼の式に加わって、まず無事に万端終ったのである。

それからやがて六ヶ月ばかり経って、翌年の二月だったが、私の塾の女門弟が箏がほしいという、古いのでもいいというので私は早速琴屋を呼んで、幾面も取よせて色々のと検定して中から一番気に入った品を周旋してやった、ところが不思議にもその品は曾て見た事がある様な気がする、もしやと、箏樋の裏を見ると吃驚した、即ちその貼紙を発見したのだ、買った娘は、恰も何か白羽の矢が自分にでも当ったかの如く思って、ワッとばかり自分の前に泣き伏した、自分は色々と慰めて、漸く安心させたが、今もその娘が愛用している。

するとまた、四ヶ月ばかりの後のことだ、私の講習所の支部を大阪に置いてあったがそこへ出稽古に行ったところ、一人の門弟が古箏を持って来て、自分に見てもらいたいというのである、これも、きたいに見覚えのあるので、もしやとまた箏樋の裏を検捜べると、二度喫驚、それが、即ち、他の一面の方である、偶然といえば偶然の事だが、何とあまりに不思議な事ではないか、ものの一年になるやならずして、しかも、死んだ女の言の如く、同門生の手に、この二面の箏が渡ったとは、実にこの上ない不思議ではないか、人の思いは恐怖しいとは兼て聞き及ぶが、箏の凄いものだという事と関係して、私は、よく知人に談す物語である。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「怪談会」柏舎書楼
　1909（明治42）年発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二面の箏

鈴木鼓村

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/